

第六章 キミよ、日本を守れ

宇宙の誕生から説き起こし、生命いのちの尊さ、その尊い生命を奪う最大の悲劇が戦争であること、そして、戦争こそ、人類が「生物」として地球に分割生存する限りにおいて、避け難い、正に、人間の「性さが」あるいは「宿命」とも云うべき悪行なのだと論述しました。

有史以来、現代まで、人間は生命いのちある限り平和を希求し、家族を核とした人間相互の「絆」を大切にしてきたにも拘らず、私利私欲の為に争いに走り、それは、国家間において「戦争」として繰り返されました。

今、この現在においても、地球上のどこかで、人間同士が殺し合っているのです。

『 戦争は悪である。』

しかし、人間が生存する限り、戦争は必ず生起する 』

悲しいかな、人間世界のこれが現実だと悟るしか仕方がないのです。

第一章から第五章までを通し、事例に照らして判ったことは、

人の生命は尊いものであり、個人は生命を全うしなければならない

人の生命を奪う最大の惨禍は戦争である

人間の生い立ちに格差がある限り、戦争は繰り返される

戦争は他の手段をもってする政治の継続に他ならない

世界の政治体制は「自由」を保障した議会制民主主義が大勢を占める

我が国周辺には独裁体制国家が存在し、不安定要因になっている

朝鮮戦争は休戦状態のままである

国連の安保理決議の効力には限界がある

国際社会は各国の国益が交叉して渦を巻き、変転激動の連続です。この中で、

「国の平和と安全」を堅持するには、国家としての安全保障体制と国民の国防に対する理解と覚悟が求められます。

こうした現実を背景に、

「日本を守る為に何をなすべきか」
を考察するに当たって、先ず、我が国の特性を把握しておく必要があります。

一 軍事上の地理的特性

日本は島国であり、地理的位置が対外関係において極めて重要な地位を占めています。

日本列島は、北東アジアの東端に位置し、四面を海に囲まれて弓なりに弧を描き、西側は日本海を包み込み、東側は太平洋に面し大きく開放されています。

特に、宗谷、津軽、対馬の三海峡が、日本海とオホーツク海、日本海と太平洋、そして、日本海と東シナ海との出入り口を、夫々扼して（押さえ握ること）おり、また、北海道から北東に伸びる千島列島線がオホーツク海と太平洋とを、九州から台湾付近まで点在する南西諸島が東シナ海と太平洋とを、夫々分離するように連なっています。

こうした日本列島線が、中国中央部の東沿岸、朝鮮半島、ロシア東部の沿岸（旧沿海州）から太平洋への、さらに、樺太から太平洋への海路を扼している為に、我が国とこれらの地域とは、歴史上、特に軍事面で多くの関わりを経てきました。

古代、我が国が国家としての体制を確立していなかった時代には、邪馬台

国の卑弥呼が「魏」^きに使者を送った史実（二三九年）のように、「倭」^わと呼称

された日本が中国大陸の強国に対して一方的に「朝貢」^{ちやうこん}することによって、争いはありませんでした。

やがて、日本が「大化の改新（六四五年）」を経て、中央集権の国家体制を確立すると、国家としての対外政策が複雑になり、時として、周辺諸国との間で摩擦を生じ、軍事衝突に発展するようになります。

日本が史上初めて、中国大陆の強国と戦ったのは、「白村江の戦い（六六三年）」でした。それから、第二次世界大戦が終了するまでの約一、二八〇年間に、我が国と周辺諸国との間では、「戦争」と「平和」の時代が、幾度となく繰り返されました。

この「戦争」と「平和」の時代は、その要因によって、大きく三つのパターンに区分できます。

(一) 中国大陆方面からの脅威に対抗した「戦争」

白村江の戦い（六六三年）
はくすきのえ

滅亡（六六〇年）した「百済」くだらの遺臣から国家再興の援軍要請を受けた我が国が、朝鮮半島の騒乱に介入して南下した「唐」の脅威に対応した戦い。唐・新羅連合軍しんわと戦った我が国と「百済」との連合軍は敗れ、「百済」は完全に滅亡し多くの百済人が渡来した。

元寇げんこう 「文永の役」えいき（一二七四年）：「弘安の役」（一二八一年）

中国に興った好戦的な強国「元」が、朝鮮半島を経て吉岐・対馬を蹂躪じゅうりつした後、二回に亘り九州北岸に襲来した為の防衛戦。台風の直撃もあって二回とも「元」の遠征部隊は壊滅した。

日露戦争（一九〇四～〇五年）

ロシア帝国の東進・南下政策の脅威に対抗した戦い。中国東北部における陸戦（奉天会戦）と日本海方面での海戦（日本海海戦）に日本が勝利し、米国の斡旋あっせんにより講和条約を締結した。

(二) 日本の対外膨張政策による周辺諸国との「戦争」

豊臣秀吉の朝鮮出兵 「文禄の役」(一五九二～九三年)・「慶長の役」(一五九七～九八年)

戦国の騒乱を鎮め全国統一を果たした豊臣秀吉が、海外覇権の夢を追って朝鮮半島に二回に亘り出兵した戦い。明・李氏朝鮮連合軍との戦闘で勝敗がつかぬまま、秀吉の死去により撤兵終結した。

日清戦争(一八九四～九五年)

朝鮮の支配を巡って対立した日本と清国間の戦争。王朝末期にあって弱体化していた「清」と、軍備の近代化を図っていた我が国との戦い。日本の勝利によって終結した。この戦争の勝利が、中国大陸に対して我が国が権益拡大を図る伏線となった。

日中戦争(一九三七～四五年)

中国大陸における権益拡大を企図した我が国と中華民国との戦い。日本の敗戦によって終結した。

太平洋戦争 「日本閣議決定呼称は大東亜戦争(一九四一～四五年)」

A B C D(米・英・中・蘭)による経済封鎖に対抗した我が国が、日独伊三国同盟と日ソ中立条約とを背景に、中国戦線を拡大して東南アジア方面を含めた太平洋全域に侵攻した戦い。日本の敗戦によって終結したが、沖縄は我が国として史上初めて、外国軍との地上戦の戦場となった。

(三) 中国大陸方面からの脅威がなく、日本も対外膨張政策を採らなかつた為に派生した対外的「平和」

平安時代(七九四～一一九二年「約三九八年間」)

江戸時代(一六〇三～一八六七年「約二六四年間」)

* 江戸時代は江戸に幕府が開かれてから「大政奉還」までの期間。

注：末期に薩英戦争（一八六三年）・馬関戦争（一八六四年）が発生するが諸藩による局地戦であったので国家としての対外的「戦争」の対象から除外する。

この両時代には、島国の特性を利用して外界とは孤立（平安時代は二回遣唐使を派遣したのみ）しながらも、我が国独自の王朝文化（平安時代）と庶民文化（江戸時代）とが発展した。

日本文化の独自性が形成される貴重な時代となった。

こうして、約一、二八〇年間を概観すると、平安・江戸時代の約六六二年間、即ち、全期間の約五二％は「平和」を享受していたことが判ります。

奈良時代（七一〇～七九四年「約八四四年間」）には朝鮮半島を統一した新羅との間で緊張関係に陥った時期があり、室町時代（一三三六～一五七三年「約二三七年間」）には「倭寇」が朝鮮半島から中国沿岸を襲っている為、対外的な「平和」の観点から除外しましたが、これらの期間をも含めるならば、対外的「平和」の期間は更により長くなります。

我が国が対外膨脹政策を採った為に生じた戦争は別にして、大陸からの脅威に対抗した戦争からは、次のことが判ります。

「白村江の戦い」では、敗戦した後我が国は「唐」の侵攻に備え、九州の大宰府近辺に「水城」^{みずき}を構築して防備を固めています。この時は、「唐」の遠征がなかった為に国内における外国軍との戦闘は避けられました。が、もし「唐」が遠征していたならば、九州は戦乱によって荒廃し、結果によっては「唐」の属領になった恐れがありました。

「元寇」では鎌倉武士の奮闘はあったものの、最終的に蒙古軍を壊滅したのは台風でした。二回の襲来ともに台風が遠征艦隊を襲ったことは極めて幸運でした。しかし、吉岐・対馬を防護できなかっただけでなく、戦力では火薬を使用した蒙古軍に押され気味だったのです。こうした鎌倉幕府軍の戦力実態を正しく分析しないまま、勝利を直接左右した台風を「神風」と位置づけ日本を「神州（神の国）」と過大評価したことは、学ぶべき戦訓を自ら放棄する結果を招きました。特に、この「神州」思想が、太平洋戦争末期、劣勢

を一気に挽回しようとする戦争指導者によって、各種の特別攻撃隊を「神風」として仕立てる口実に利用されたのは極めて不幸だった、と云わざるをえません。

近代に入って生じた「日露戦争」では、大国ロシアとの戦いに、明治維新を経験した政治家と軍人とが日本の存亡を掛けて戦いました。戦費の調達、武器の購入、全てが薄氷を踏む状況の中で、戦争終結の時期を見据えつつ、拳国一致してロシアと戦ったのです。

奉天での大会戦では、幕末騒乱を経験した將軍達の適切な部隊運用がありました。また、日本海海戦を勝利した陰に、「日英同盟」が存在していたことを忘れてはなりません。特に、当時、世界に冠たる大英帝国が、ロシアのバルチック艦隊の長距離遠征に対して、日本との「同盟」に基づき、欧州からの遠征航路の随所で寄港と補給を阻害した事が、ロシア將兵の戦闘意欲を低下させ、日本海海戦で我が国が勝利する副因になりました。

大陸からの脅威に対抗した戦争で、島国の日本が勝利する為には、強力な同盟国が不可欠だった事実を、正しく認識しておくことが肝要です。

更に、第二次世界大戦で敗戦した後、日本は七年間の長きに亘り、戦勝連合国の統治下であり、戦争の当事者になりませんでした。この間には、朝鮮戦争が勃発し、占領下の我が国からは、板付航空基地（現在、福岡空港）や佐世保その他の旧軍港から、連合軍が朝鮮半島に向け出兵したのです。

また、ベトナム戦争では、返還前の沖縄が米軍のベトナム派兵の拠点となりました。

これらの事実は、日本列島の地理的位置が、北東アジアから東南アジアに至るまでの地域との関わりにおいて、軍事戦略上、現代においても極めて重要であることを示しているのです。

日本列島の地理的特性が、軍事上の重要性を帯びている現実を理解した上で、

「大陸からの脅威に対抗する術を構築^{すべ}しておき、自らは対外膨脹を控える政策を採ること」

が、過去の歴史が示す我が国の「平和」維持の方策だと云えます。